

浪曲と映画と小説の愛知用水運動

はじめに

久野庄太郎と浜島辰雄の現地調査によって愛知用水の計画が具体的なものになると、昭和 23 (1948) 年 8 月 7 日に知多農村同志会が武豊町の堀田稲荷神社に集まり、話し合いがおこなわれた。山崎延吉も出席し、そこで市町村が歩調を合わせて愛知用水運動ともいわれる啓発活動を始めることが決まった。

当時は夢のような愛知用水の構想である。愛知用水の説明会を開くといっても、一日の仕事を終えて帰宅した人たちが、晩にわざわざもう一度出かけていこうという気持ちになるには余程の工夫が必要だった。そのためさまざまな秘策、奇策が練り出された。なかでも初期に集中しておこなわれた浪曲による集客は大成功をおさめた。愛知用水をなによりも先ず人気の浪曲の世界に導き、用水開削の苦勞の物語、義理人情の涙の物語として心情に訴えていく方法だった。それは決して新しい手法ではなかった。かつて近代国家を歩み始めた日本は、国民国家の理念を上からのおしきせではなく、庶民の側にあった浪曲によってもたらしていったのである。浪曲によって語られた義理人情の物語とその声は、それほど大きな力を持っていた。

ここでは夢のような愛知用水の構想の話が、愛知用水運動として人びとにどのようなかたちで伝えられていったのか、その広報の手法を見ていきたい。

浪曲「都築弥厚の苦心談」

愛知用水の現地調査を経て、浜島辰雄によって描かれた「愛知用水概要図」は、横 1.6m×縦 3.6m もある巨大なもので、現在も愛知用水のシンボリックな存在である。説明会や陳情の場には表装されたこの愛知用水概要図が持ち込まれた。その巨大な概要図を掲げておこなわれる愛知用水の説明会の会場にはできるだけ多くの聴衆を集めたい。知多農村同志会は昭和 23 年 8 月 7 日の話し合いで、市町村内の学区ごとの説明会を開催すること、その説明会に「浪曲師三門博を呼んで『都築弥厚の苦心談』で人を集める」ことを決議した（『愛知用水と不老会』 p. 81）。

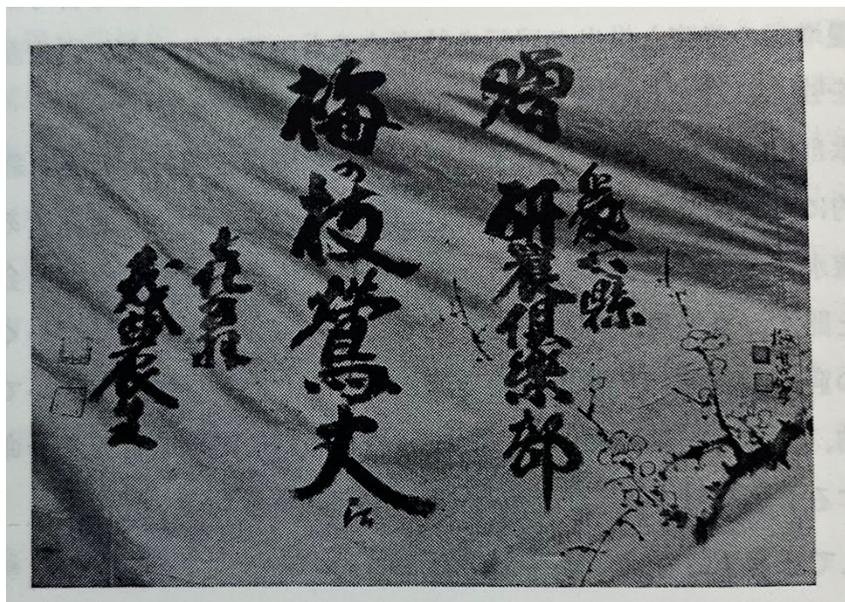
当時、浪曲は庶民の娯楽で、人を集めるのには格好の出し物だった。しかも三門博といえば、当時は広沢虎造と並ぶ最も有名な浪曲師だった。さっそく浜島辰雄が話し合いの翌日に三門博の興業権を持つ安城南明治の山口老人のところに交渉に出かけた。しかし「三門博はギャラが高いし、毎日連続ということはむりだ。そのかわりに梅ヶ枝鶯（うめがえうぐいす）というのがあるから、それがよい」と山口老に言われたという（『愛知用水と不老会』 p. 81-82）。

その頃の三門博の正確なギャラは不明だが、4 年後にあたる昭和 27 (1952) 年 4 月 25 日の東海毎日新聞にラジオ・スターの出演料番付が掲載されている。浪曲のトップは当時広沢虎造で 35,000 円、三門博は 2 位で 30,000 円であった。浜島からの報告を受け、「久野庄太郎が交渉し、山口老と話し、梅ヶ枝鶯と決定」した（『愛知用水と不老会』 p. 82）。それでも梅ヶ枝鶯の 1 日の出演料も 10,000 円もした。当時の公務員の初任給 2 ヶ月分以上にあたることを考えると、大変な出費を覚悟したことになる。

知多農村同志会では浪曲の演目を「都築弥厚の苦心談」と決議していた。周囲から反対されながらも明治用水を構想した都築弥厚の物語である。梅ヶ枝鶯の演目のなかに既にこの浪曲があったという話もある。この浪曲を聴いた人びとは、そのまま愛知用水における久野庄太郎と重ねることができたのだろう。明治用水開削の苦勞の浪花節で人を集め涙を誘い、そのあとに愛知用水の計画を話すという説明会のスタイルができあがった。

地域での説明会を重ねた昭和23年11月、久野は自宅に研農倶楽部の人びとを集め、愛知用水の説明会をおこなった。山崎延吉を講師とし、浜島が愛知用水計画を説明、梅ヶ枝鶯が浪曲「都築弥厚の苦心談」を口演した。研農倶楽部の人びとは浪曲に感激し「久野の心中を思い感極まったの男泣きを始めた。皆泣いた。そこで早速、皆で金を集め、絹布を求め、山崎先生に揮毫してもらってできたのが、曲幕である」（『愛知用水土地改良区五十年の歩み』p.28-29）。

曲幕とは浪曲を口演する際のテーブル掛けで、山崎延吉の日記には梅ヶ枝鶯の曲幕を揮毫した日のことが記されている【写真①】。昭和24（1949）年1月13日のことであった。「久野来り。梅の枝鶯丈へのテーブル掛に執筆した。久野の依頼で梅の枝鶯のテーブル掛は二枚書いた」。知多農村同志会や研農倶楽部の人びとも協力したが、記録からは久野が後日ひとりで山崎邸を訪ねていることがわかる。浪曲付きの説明会はその後も続き、70回ほどおこなわれたという。



写真① 研農倶楽部から梅ヶ枝鶯に贈られた山崎延吉揮毫による曲幕

アメリカ映画と説明会

昭和23-24年という早い時期に、大府在住の元東知多農協組合長・深谷泰造氏は、月曜会のメンバー16人程と農協関係者らで愛知用水の計画を聞いた。会場の農協2階の和室には愛知用水概要図が天井から吊るされていた。深谷らはその後も何度も説明会を聞くことになるが、初めて聞いたのは浜島による説明会だった。「若かったので、とんでもない内容だなと感じました。木曾の水を知多半島に持ってくるというだけで夢のような話なので、そんなことができるのかと思いました。そんなことが実際に出来るのかという意味の質問をしたかと思います」。

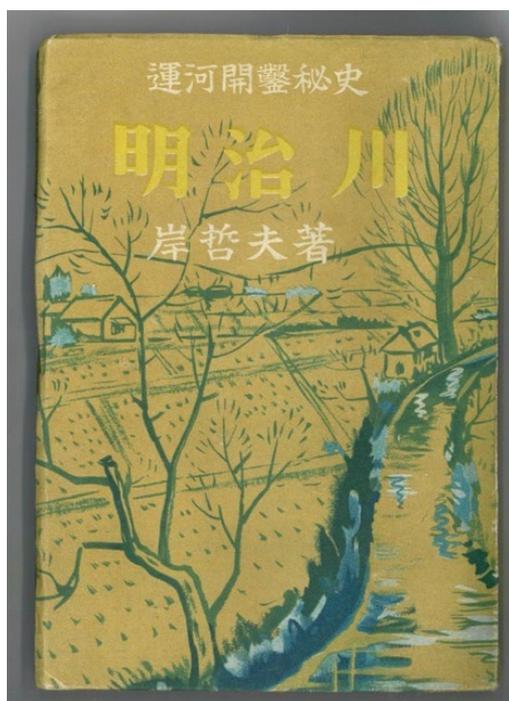
久野は後に次のように回想している。「はじめは映画をやったです。映画をやるとね、子どもたちが来る。聞かせたい人に聞かせられん、わいわい子どもたちが来てね。これはいかんで浪花節のほうがいいって途中から方式変えて、停電するしね、だから浪花節が良からうってことに

なって、梅ヶ枝鶯という上手な浪花節がいましてね、かなり売れとったですよ。その人が台本持つてるっていうことに、都築弥厚のね、明治用水の、じゃあそれをひとつやってもらおうということになって、それをやってもらって、私がこの幕間にこれを話して、そして次から次にいったですね」(NHK教育 1975年6月21日放送：教養特集「近代日本の足跡-愛知用水-」)。浪曲の口演をおこなう以前から映画を上映していたという記録は残っていないが、当時は停電という問題があっただろうことは想像できる。

映画については昭和30(1955)年以降、自身が説明会で映画を上映していたという方がある。元愛知用水土地改良区職員・岡田久仁彦氏は、就職した昭和30年、久野がおこなう説明会に職員として同行することになった。そこでアメリカ映画の上映があったという。話は夜中12時まで続いたため、オート三輪で久野を家まで送り、そのまま泊めてもらうこともあった。浜島にも同じように送って泊めてもらった。昭和30年秋、それまで小学校の先生が映画を上映してくれていたが、久野から自分で上映できるようにと言われ、農林省木曾川事務所に16mm映写機の上映方法を学びに行った。上映する映画はアメリカ文化センター(名古屋市中区大津町)に借りにいった。映画は「T.V.A.の町」「フーバーダム」「農業ファーム」「アメリカ万華鏡」など、米国の土地改良映画が多かった。貸出期間が短く、数日借りては返しを繰り返した。農林省のものでは、スプリンクラー(人工雨)などの実演フィルムを使った。映写機講習の受講ノートやアメリカ文化センター所蔵作品リストなど、当時の資料は思い出の品となり、いまでも大切に保管されている。

小説『明治川』を配布

久野は愛知用水実現のため、説明会だけでなく『雨邨水利史談』(溝口三郎編、片原謙原著、1948年刊)や『明治川』(岸哲夫著、藤谷崇文館、1946年刊)を配布した(『愛知用水史』p.136)。『明治川』も浪曲と同じように、明治用水開削の苦労を伝える小説で、再版(1948年)のときには表紙に「運河開鑿秘史」と記された。久野が配った『明治川』は、配布時期から考えてこの再版されたものと思われる【写真②】。



写真② 愛知用水実現のために配布された
岸哲夫『明治川』(藤谷崇文館、1948年)

その後、『明治川』の著者・岸哲夫は「東海毎日（新聞）に特別の好意をもって連載をすすめられ」（東海毎日新聞 1950年8月3日付）、構想を改めて昭和25（1950）年8月8日から11月27日まで111回にわたって、連載小説「明治川」として東海毎日新聞に掲載した。東海毎日新聞の社長であった山崎延吉からの働きかけがあったのだろう。新たな構想で連載された「明治川」も昭和27（1952）年11月に黎明書房（名古屋）から刊行されている。あとがきには、「（小説連載の間に）熱心な読者から手紙やハガキをたくさんもらった」、「愛知用水推進者の一人である久野庄太郎氏らの苦心談が、私の心を打った」と記されている。愛知用水実現のため、さまざまな手段で明治用水の苦勞を愛知用水に重ねていくという方法がとられ続けたのである。

三門博「開けゆく安城ヶ原 偉人弥厚と日本デンマーク」

当初の興行師の薦めで浪曲は梅ヶ枝鶯によって口演されたが、愛知用水が通水して15年後の昭和51（1976）年7月、三門博も浪曲「開けゆく安城ヶ原 偉人弥厚と日本デンマーク」を口演した【写真③】。



写真③ 当時の愛知用水運動の姿を思い出させてくれる三門博の浪曲「開けゆく安城ヶ原 偉人弥厚と日本デンマーク」のレコードジャケット

これは明治用水土地改良区が主催（安城市共催）したもので、三門博レコード製作発表会（ローオンレコード株式会社）が安城でおこなわれた。梅ヶ枝鶯の浪曲「都築弥厚の苦心談」を知ることにはできないが、明治用水土地改良区に大切に保管されている三門博のレコードが、当時の愛知用水運動の姿を思い出させてくれる資料となっている。

（公財）愛知・豊川用水振興協会研究員 達 志保

『愛知用水土地改良区創立七十周年記念誌』（愛知用水土地改良区編・発行、2022年）に報告したものに、新たに資料を加えた。